

リスクテイキングについて考える

21世紀WAKAYAMAの編集担当者が前号（vol.82）の途中から、お休みをとることになり、慣れない編集作業を引き継ぎ、悪戦苦闘しています。ただし、編集担当者のリスクマネジメントとして、編集作業マニュアルが作成されておりましたので、初心者の小生でも、何とか代理で編集作業が出来ております。今回のvol.83は最初からの編集作業となり、執筆者の皆様方にご寄稿の依頼を完了した時点で、小生もまた、私用中のちょっとした不注意による事故で、約1カ月のお休みを頂くことになり、関係の皆様には、多大なるご迷惑をお掛け致しましたこと、深くお詫び申し上げます。しかしながら、その後の皆様方のご協力により、何とか予定通りに発行できましたことに対して、感謝申し上げます。

それでは、私事ですが、小生の事故について振り返ってみたいと思います。事故は、日曜日の夕方4時半ごろに起こりました。樹木の伐採手伝いのほぼ終了時に、不注意から、一段下の畑に転落し、脊椎を骨折し、救急搬送され、そのまま、入院、手術となるものでしたが、シニアの身でありながら、幸いにも回復が早く、約1カ月で職場に復帰できました。

災害・事故は、リスクが顕在化したものであるといわれています。同じ行動をしていても（正しくは、しているように見えても）、災害や事故に遭遇しないことが多々ありますが、その裏にはリスクが隠れています。実際には、1つの行動・動作の陰にある数々のリスクの内の1つでも、その許容値を超えた場合に、災害・事故として顕在化してくるのです。

この潜在的なリスクとしてハインリッヒの法則があります。これは、1件の重大災害の背景には、29件の軽微な災害があり、更にその裏には300件のヒヤリ・ハットがあるというものです。

そして、リスクの顕在化（災害・事故の発生）の大きな原因の一つに、人間の行動に関するものとして、不安全行動が挙げられます。不安全行動を更に分類すると、①意識低下、心身不良、誤判断等による真のヒューマンエラー、②意図的にルールを守らない違反、③個人の判断によるリスクテイキングがあります。リスクテイキング（自らリスクと取る）とは、リスクを知らない、知っていても面倒くさい、又はここまで大丈夫と判断したり、更にはリスクに快感を覚えチャレンジする等のことです。人間の行動には殆どが決められた手順をもたず、自分で考える行動となり、あいまいで広範囲なリスクが潜んでいます。設備的、管理的な両面から徹底的な安全対策を行っても、リスクテイキングに対する対策は、非常に難しいと感じています。リスクテイキングを防止するには、個人のリスクに対する感度を上げて、個人が許容できるリスクレベルを下げることに つきます。個人が許容するリスクレベルは、個人の知識・経験、技術・技能により変わってきますし、我々シニアは、高齢化による身体機能の低下を自らのリスク許容値に加味していかなければなりません。また、カナダの心理学者のジェラルド・J・S・ワイルドの提唱するリスク・ホメオスタシス理論では、人間は得られるだろうと期待する利益と引き換えに、自身のリスクの主観的な推定値をある水準まで受容するとし、リスクを最小にするのではなく、最適化するという目標をもって行動するとしています。そして、道路や交通網を整備しても交通事故はなくなるということを実験で実証しています。すなわち、設備的な安全対策をしても、人は、それに安心し、安全対策を自分の行動の防具として、今より許容するリスクレベルを上げるということをご参考までに記しておこう。

そこで、小生の事故をみてみますと、これまでの経験や知識、また安全に対するマネジメントは、自分でも鋭いものだと思っていましたが、今回の場合、作業終了間際のチョイ作業となり、それまで行っていた安全作業に対し、自分の甘えからリスクを避けるデメリット（キチントする面倒）よりも、リスクを取るメリット（手抜きによる時間短縮）を取ってしまった結果だと思います。このように、安全は、健全な状態で意識があっても、取り巻く環境や立場から生まれる自分に対する甘えが最大の敵となりうるのです。

研究・技術開発、工場勤務の時代には、研究・技術開発から製造現場の管理まで、念頭においてきたのは、安全管理であり、隠れているリスクを徹底的に抽出することで、全員がリスクを学び、リスクを取らないように心掛けてきました。これらの実践を日常のマネジメントに活かし、リスクマネジメントを中核としたあらゆるマネジメントシステムを構築してきました。品質や環境のみならずBCP（Business continuity plan）や昨今の会社の存続を揺るがすようなコンプライアンス等の数々のマネジメントシステムの構築においても、考え方は一つで、非常に取り組みがしやすかったことを記憶しています。しかしながら、最大の敵となる、個人個人の甘えをどのように防ぐのが大きな課題と思っています。また、自分の甘えがチャレンジ精神を鈍らせる元凶となるので、シニアとなった今でも、若々しく生きるために、今回の事故を契機として、再度、自分に対する甘えをなくし、いつまでも何かにチャレンジしていきたいと思っています。

（中西 望）